

## はじめに

人類が後足で立ち、前足を鋭敏な手へと変化させてから、人間の身ぶり手ぶりは広範囲に発達してきた。歩くために使われていた以前の前足は、新たにコミュニケーションを担う繊細な器官となった。動物の中では最も表情豊かな「顔」をもつことに助けられ、「手」は身体を使った複雑な合図のレパートリーを数多く発達させてきた。BODYTALK(身ぶりが語る)と題した本書が説明しようとしているものは、まさにこの言葉ならざる言葉である。

世界中を歩いていると、なじみ深いジェスチャーが消えて、その代わりに奇妙なジェスチャーが現われ、その意味が分からないことがある。経験豊かな旅行者でさえ誤解を生じやすい。ある地域では礼儀正しいジェスチャーが他の地域では猥褻な意味をもち、ここでは友好的なジェスチャーがあそこでは敵意を示すものになる。「ジェスチャー・ガイド」の必要性が生じるゆえんである。

面白いことに、地域による多様性が見られず、一見普遍性があるように思われるジェスチャーもある。地球の裏側へ旅行しても、似たような身ぶりを見かけてほっとする。笑顔は世界中どこでも笑顔である。しかめっ面はしかめっ面、凝視は凝視、こぶしを振り上げればその人の気持ちは疑いなく伝わる。このように、ボディ・ランゲージの中には基本的と考えられる要素もあるが、グローバルな合図であっても、あらゆるジェスチャーは研究する価値がある。人はみな笑うが、ある地域では「大声で笑うこと」は不作法とされており、地域によって表現のしかたや強さが異なる場合があるからである。最も基本的なものでも、地域ごとのルールを理解することが大切なのである。

「ジェスチャー・ガイド」を編集する際の問題の一つは、どれを除外するかである。多くのよく知られているジェスチャーを入れることは無意味なように思われるが、一般的なジェスチャーであっても珍しい例は含めた。たとえば、「手をつなぐ」や「額にキスする」については、親子間の通常のやり方は省いたが、誤解されやすい使い方は挙げてある。また、特別な訓練を必要とする、正式な手話に関するジェスチャーも省いた。本書に説明してあるジェスチャーは、その意味でみなインフォーマルなものであり、普通の人々が日常生活を送る際に、意識的にも無意識的にも使うものである。